

「ウエポタラ」 26 分

アイヌ 東アジア日本北海道二風谷における悪霊払いウエポタラ N.G.マンロー

撮影 1930 年 9 月-1935 年 復元 1992 年 修正 2018 年

主な内容

萱野茂によるイントロダクション。二風谷と沙流川、ダムの問題、子ども時代のマンロー先生の思い出。ウエポタラの始まり。マンローの調査研究の重要なインフォーマントは、貝沢イソノアシエカシであった。沙流川対岸への渡船場を営んでいた古老だが、彼は 1910 年のロンドンでの日英博覧会の参加者でもあった。彼が主宰し、トウス(女性のシャマン)の託宣でウエポタラが始まる。囲炉裏の神、カムイフチにイナウが捧げられる。イソノアシが単独で囲炉裏に向かうシーンは、後に 1930 年に恐らくイヨマンテ(クマ送り)の本格的撮影に先立って撮られた最初期映像であることが判明した。マンローの記述によると、彼は重要なウエポタラのやり方として、① 沙流川の河原へ行き、水の精に祈願するもの、この中には 6 つの関門をつくり、患者を潜らせながら関門に火を放つものがあること。② 樹木の神に病魔の退散を祈願するもの。③ 困ったとき最も頼りになるとされる廁の神に病魔の退散を祈願するものなどがあり、35mm 撮影の部分は女性用の、16mm 撮影では男性用便所の前での祈願である。②だけは、マンロー自身による 16mm フィルムの記録のみであるが、①③は、16mm と 35mm フィルム双方の記録がある。進捗報告書簡群によると、35mm フィルム部分は 1934 年 6 月に京都大沢商会から呼び寄せた 2 名のカメラマンにより撮影されたもので、追加撮影を 1935 年 9 月に行っている。④ 出産に関する呪いの部分が追撮分である。

制作のバックグラウンド

N. G. マンローは、悪霊払いの儀礼、ウエポタラの研究を、二風谷における自分のアイヌ民族調査において最も重要な業績と捉え、その撮影に 5 年をかけた。が生前、遂に完成できなかった。1970 年代初め、公益財団法人中下記念財団は、北大の地質学者、湊正雄教授の強い勧めでエンサイクロペディア・シネマトグラフィカへの収録を目指し、北大所蔵のマンロー関連フィルムを預かり、複製作業などを行った。92 年ようやく復元作業に取り掛かった。没後 20 年に刊行された遺稿集「AINU Creed and Cult」の当該部分を和訳し、萱野茂と岡田一男で訳文と、当時既に所在確認ができていた 35mm フィルムと 16mm フィルムを照合した。マンローの記述をベースにしなが、萱野茂の判断も加えて構成し、デジタル統合で完成したのが本作である。それから 10 数年、マンロー関連資料デジタル化プロジェクトで、王立人類学協会 (RAI) 所蔵のマンローの C. G. セリグマン宛て進捗報告書簡群の精読により、また北大植物園から新たに所在確認できた 16mm オリジナルフィルムの検討から、多くの訂正を迫られる事実が判明した。今回は 92 年版を活かしつつ字幕部分に修正を加えたものを上映する。

マンロー自身の撮影と職業カメラマンの撮影

第 1 次世界大戦後、小型映画の激しい開発競争が始まり、35mm 超小型カメラ、16mm カメラ、9.5mm カメラなどが次々と紹介された。マンローは京都、大沢商会が 1929 年に代理店となった米国のベル

アンドハウエル社のフィルモ 70A16mmカメラを入手したと考えられ、同機を 35mm にスケールアップしたアイモカメラ 2 台とそれを操作するカメラマンを招き、同時に静止画写真撮影を地域の写真館主に行わせる重厚な布陣で記録にあたった。2000 年代に入って北大植物園・博物館所蔵フィルムの整理が進んで、新たに確認された 16mm オリジナル(北大登録 48670)により、これらの関係が明確になった。マンローは、撮影側の事情により、儀礼の進行を中断することを避けるため、非常用の第 3 のカメラとして自分の 16mm カメラを用意していた。長期にわたり自ら撮影し、さらに映画専門家を動員したマンローのやり方は、先行した八田三郎の手法や、同時代に映画手段を研究に用いた渋沢敬三や、宮本馨太郎と比較しても、際立ってユニークと言えるだろう。

マンローの映画遺産は、現在、北大植物園・博物館が管理するマンロー没後、未亡人から北大に有償譲渡された 16mm、35mm フィルムと国立歴史民俗博物館が管理するクマ送り関連の 35mm フィルム、さらにマンローが英国に送ったクマ送りの縮小 16mm プリントなどに大別される。歴博・北大の可燃性フィルムは国立映画アーカイブへの移管手続き中であるが、それに先立ち、4K スキャンが行われた。彼が英国に書き送った書簡群や、日英両国にまたがる静止画とそのキャプションも全てデジタル化され単一のプラットフォームでの、アイヌ民族文化の発展のために利用可能な状態に整備されつつある。

最後にマンロー自身について。彼は 1863 年スコットランドの港町ダンディで生まれた。父親も医師であった。エジンバラ大学医学部で学んだ後、アジア航路の船医となり日本に来た。横浜での医師としての活動は 1891 年からで、当時は考古学に関心を寄せ、横浜三塚遺跡の発掘などで成立期の日本考古学に大きな貢献をした。また、晩年まで長年にわたり日本アジア協会の有力会員として同会でしばしば講演を行っている。北海道に初めて渡ったのは、1888 年である。以後しばしば北海道を訪れ、考古学とアイヌ民族学双方に関心を寄せた。1908 年、医学博士号取得のため生涯ただ一回の一時帰国をした。この時、スコットランド博物館などと日本における収集活動の打合せを行った。またこの年に、王立人類学協会(RAI)の会員になった。縄文人の文様とアイヌの民族文様の類似性に関心を寄せ、頻繁に北海道を旅行し、白老でクマ送りを見ている。1916 年には北海道庁からアイヌの生活向上について諮問された。日本アジア協会で白老のクマ送りに関し講演し、それが英字新聞ジャパン・アドヴァタイザーに全文掲載されている。彼は夏季、避暑地として軽井沢に滞在し、そこでも外国人滞在者相手の医療を行っていたが、彼を院長とするサナトリウムが建設され、1923 年からは結核患者治療に尽くした。マンローのアイヌ研究を大きく飛躍させたのは、1929 年の英国人類学者 C.G.セリグマン夫妻の来日だった。当時、彼は RAI 会長でロンドン政経学院(LSE)の民族学教授であったが、元々は内科医であり、何よりも人類学調査に世界初の映画記録を導入した A.C.ハッドンのケンブリッジ大学トレス海峡先住民調査の一員であった。彼は指導教官としてマンローの映画によるアイヌ文化の記録を可能にする助成金をロックフェラー財団から取得した。またこの年、京都の大沢商会が米国ベルアンドハウエル社の極東総代理店となり、小型の 35mm カメラ、アイモや、16mm カメラ、フィルムの国内販売を積極化した。こうした流れの中でマンローの 1930 年後半からの二風谷でのアイヌ民俗誌映画への取り組みが始まった。

国立歴史民俗博物館研究報告 150 集に、内田順子の主としてマンローの「クマ送り」フィルムの、また 168 集に、岡田一男の主として「悪霊払い」フィルムの考察が掲載され、PDF 版がダウンロード可能。